

# らいふ LIVE 創 REATOR

つくりえいたー

NO.22

2004.11.1

研究広報誌

## CONTENTS

「意味と内容」が  
ひろがる学びの創造  
まなざしの共有によって

|                              |   |
|------------------------------|---|
| ●教育研究発表会のご案内                 | 1 |
| ●学習紹介 「たしざん(1)」(1A算数)        | 2 |
| ●学習紹介 「のりものたんけんたい」(1・2Fみらい)  | 3 |
| ●学習紹介 「人にやさしく地球にやさしく」(3Aみらい) | 4 |
| ●学習紹介 「わたしと運動の関係を創る」(5B体育)   | 5 |
| ●学習紹介 「紀州徳川家八代將軍吉宗」(6B社会)    | 6 |
| ●学習紹介 「教育実習生の算数授業」(算数専科)     | 7 |
| ●わたしの学校 HOT LINE 「原点に立ち返って」  | 8 |

### 2004度 教育研究発表会のご案内

#### 「意味と内容」がひろがる学びの創造 —まなざしの共有によって—

《平成16年11月19日(金)》

今年も海の向こうで、イチローやゴジラ松井がメジャーリーガーとして大活躍した。彼らを見ていると、日々調整しながら進化していることがわかる。

**They will go down in history. \***

歴史は改革の連続でもある。そのなかにあっては、やはりうまく調整できるものが時代の流れを先取りしていく。となると、守るということは衰退を意味するのだろうか。

しかし、私たちは、教育界の中での“不易”をもちだして研究の対象とした。「子どもの側にたって単元構成するとは」、「子どもが主体となって進める学習とは」、「子どもの学びをみとるとは」…。それら“不易”はけっして“流行”に反発するものではない。むしろ不易への挑戦こそが、無限大の新しい可能性を生むと信じている。

では、何の調整もなく実践研究を進めているかというとそうではない。

2001年度から2004年度にかけての研究では、学校の教育構造そのもの、つまり組織も見直そうとした。そこで掲げた理念は、現在の研究主題にそのまま通じるといつてよい。ただ、組織を変えても体質を変えないことには、進歩はあり得ないし、当然成果も期待できないのである。

『進みつつある教師のみが人を教える権利をもつ』——これは、ディーステルヴェーク\*\*のことばである。私たちは教材研究の深さだけの授業しかできない。ならば、本当の教材研究をして授業に臨もうではないか。その構えが教師を一步前進させるのである。私たち一人一人の一歩が大きな力になることをめざして、11月19日の教育研究発表会をむかえる。

愛須 一弘 (研究企画長)

(編集部注) \*「彼らは歴史に名を刻むであろう。」 \*\*[F.A.Diesterweg 1790-1866 : 発見学習などに業績]

算数科 「意味と内容」がひろがる学習

## たしざん(1)の学習より

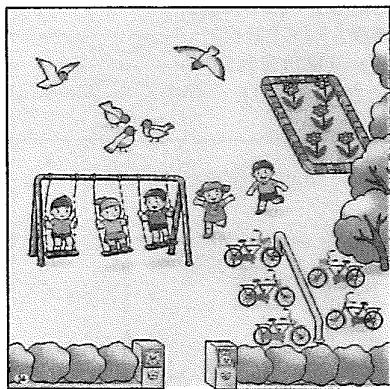
1年A組

担任 池田彦男



今年度、授業研究週間が6月に開かれた。1年生の算数では、研究授業として「たしざん(1)」の学習を行った。そのときの様子を紹介します。

中心となる課題は、「(左の絵を見て) たしざんになるお話を作りましょう。」であった。



啓林館 教科書改題

## 指導者の意図

これまでの学習で、たしざんの意味として「あわせていくつ(合併)」「ふえるといくつ(増加)」の場面の学習をしてきている。本時の学習では、課題の絵を見ながら、お話をすることで、合併の場面のお話を作ったり、増加の場面のお話をすることにより、たしざんとして統合していくこうとしたのである。また、子どもや自転車など見方により違ったお話を作れることを楽しんでほしいと考えた。

## 子どもの様子

まず、絵の中のどれも(子ども、はと、花だんの花、じてんしゃ)が5になっていることに気づいた。そして、「 $3+2$ 」のお話を作れることに気づき、お話を作っていった。

「はとが3わいました。そこへ2わとんできました。あわせて5わになりました。」というお話をできた。子どもたちは、「あわせる(合併)」のお話ができたと考えているようである。「子ども」をつかったお話も「ぶらんこに3人のっていました。2人きました。あわせて5人になりました。」というお話で、やはり「あわせる」お話ができたと考えているようである。「あわせて」と「ふえると」のお話しの区別がつきにくくなってしまっているように感じた。

学習を振り返ってみると、「きました」とかいてあるから、「ふえた」ことを意識して言っているのである。しかし、その後「あわせて5わ(人)になりました。」と書くことによって「あわせて」の意味で言っていると、とらえてしまった。子どもたちにとっては、「2つのものをあわせる」と「ふえてあわせる」のとは、違うのであるが、言葉としては、「あわせて」と同じになってしまう。そのところをはっきりさせるべきであった。

子どもの言いたいことを正確につかむのは、難しい。言葉にならない考えを正確につかむことはもっと難しい。こちらの先入観や経験で聞いてしまうからである。子どもの言っていること、言いたいことにしっかり耳を傾けることが必要であると痛感した。





みらい のりものたんけんたい  
～電車・バスをとりまく人 施設を取り上げて～



1・2年F組 担任 松尾 浩一

今年度は、バスや電車とそれにかかわる施設や人を題材として学習する。バスや電車は、附属小学校の子どもにとって登下校の手段として大切なものです、また身近なものである。バスや電車の拠点として学校からも比較的近い和歌山市駅を教材として取り上げて学習を展開している。今回の学習を通して、低学年なりに社会を見る目を養ってほしい。また見学や人とのふれあいを通して、考えたり気づいたり表現したりすることの楽しさを味わい、学校生活にはりをもってほしい。

1学期は4回駅探検を実施した。

駅探検パートⅠ

市駅の駅ビルで行われているプラレール広場（鉄道模型の体験コーナー）に参加した。線路を繋ぎいろいろな車両を走らせて子ども達は時間のたつも忘れて遊んだ。何人かは鉄道にあまり興味を示さなかったが・・・。



係の赤井さんとも仲良くなかった。

駅探検パートⅡ

2回目は、きつぶ売り場や高島屋を見学した。その後、お気に入りのものをまとめた。



駅探検パートⅢ

3回目は、いよいよプラットホームの見学。特急列車や急行列車、駅員さんに説明してもらったり、おたずねをしました。



駅探検パートⅣ

4回目は課題をもって見学した。課題は、「車いすの人も市駅から電車に乗れるのかな」である。6月18日の複式授業研究会では、この課題をもとに問題解決学習を行った。

これからの取り組みの見通し

秋からは、バスを取り上げて学習していく予定である。バスの営業所を見学したり、バスの中の人や施設の様子を見学したりして、バスが人々の生活に役立っていることや利用しやすい工夫を見つけていきたい。また、表現し伝え合う力を育てていきたいと考えている。そのために絵や文による表現力や話し言葉によるコミュニケーション能力も少しづつ身につけていきたい。

3 A

## 反応し合う個人・集団をめざして

**教師の願い：**学級というところは、同年の子どもたちが機械的に集められたもので、何かの目的をもって集まつてはいない。単なる群れではなく、学級が学習集団として機能していくことが大切である。単に仲良しグループではなく、お互いに刺激し合い高め合う集団として、子ども一人ひとりはもちろんのこと、集団としても成長していってほしいものである。

担任 山崎 立也



本学級では、「反応する」ということを大切にしている。これだけでは、子ども同士の関係はできていかないが、聞き手としては、話を聞いていなければ反応できないし、話し手としては、もう一度自分の考えを振り返ることになる。言いつ放しでなく教師との1対1でなく、周りの仲間を意識して活動していきたいものである。

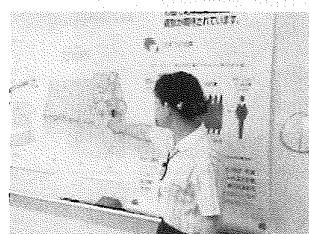


3 A 「みらい」の学習

人にやさしく地球にやさしく  
～3 A環境救助隊～

総合的な学習の時間に、環境問題が取り上げられることが多い。しかし、今の小学校3年生の子どもたちは、小学校に入学する以前から、環境問題が社会で大きく取り上げられるそれこそ環境で生活してきた。生活スタイルが大きく変化し、考えていかなければならないのは、教師や保護者も含めた今の大人かもしれない。しかし、子どもたちは未来を生きていくわけで、社会スタイルがそうだからという姿勢ではなく、今までの生活をより良いものにしていくために、子どもとはいえ、社会を形成する一員としての自覚を持てるように、現状を知り、今ある社会の仕組みの中に、自分たちができるを考え、共に生きているという意識を持ってほしい。

同時に「みらい」の学習には、学級風土と大きく関わっていくことをねらいとしている。



県海草振興局農林水産振興部  
林務課 西先生



**木の話から：**子どもたちは、環境に関わることで、「緑(草木)が失われていく」ことを問題にした。水資源の維持や土砂災害の予防、自然の空調装置としての木の効用をあげる子どもは多かった。子どもたちはいろいろなところから情報を得ていることが分かる。

しかし、表面的・象徴的な捉え方であり、その情報に関して少し観点を変えて考えたことはなく。専門家の話の中で、木の年齢によって、木の「力」も変化するということを聞いて、このことが新たにわかつた。上記したような効力が弱ってきている木などは、木材として、また切った後をどうするかを考えていくことも知ることになった。

守ることと切らないことをセットに考えるのではなく、上手に使うことがひとつようだと考えるようになった。

この後、子どもたちが手分けをして、学校全学級の紙のゴミを調べることになった。「子どもたちの考える「ゴミ」は、もう使えないということである。」

2学期は：紙にこだわらずに「ゴミとして出されているものを上手に使うには」ということで進めていく。

体育科テーマ

「わたし」と「運動」の関係を創る  
～よりよく「競争」をたのしむために～



5B 担任

石本 倫章

## ◇ 野球の教材観

野球は、高校野球やプロ野球のもりあがりから、「観る」スポーツの一つとして日本のスポーツ文化に根ざしている。また、ソフトボールを含んだ野球型のスポーツは、広く市民スポーツとしても愛されているといつても過言ではない。

しかし、野球型の運動は体育科の中で学習させるにはあまり適当でないと言われることがある。それは、以下の2つの理由からであろう。

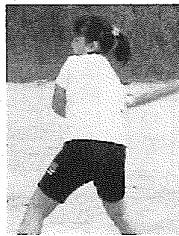
- ルールが複雑である。
- ボールが小さく、道具も使うので、経験・技術差が大きい。

しかし、本校は運動場が広く、子どもたちが思い切って遊ぶには最適な環境にある。その中で、男の子たちに人気のある遊びは「野球」と「サッカー」である。嬉々として遊んでいる子どもたちと、興味関心をもてない子どもたちの間を学習で埋めるには、わかりやすいルール化が必要になってくる。そして・・・。



♪ジャン・ジャン・ジャー・ジャ・ジャジャジャジャー♪♪

5B ベースボールからみえてきたこと！



## ◇ 興味関心・知識の差を埋めるためのルール

- ピッチャーは味方。下手投げ。三振なし。
- 三角ベース（1, 3塁とホームベース。塁間13m）
- 全員1回打ったら攻守交代。ランナーは次回に持ち越し。

このように、はじめのルールをいたって簡単にしたので、右の子の作文にもあるように、ルールはゲームをおこなう上での阻害要因にはならなかったようである。

## ◇ そして・・・

1つ目はチームの人間関係の大切さである。（右の作文参照）

もう1つは、勝敗にこだわりながらもそれに固執せず、自分たちにあったようにゲームをかえていくことである。これは、第2時のことである。相手チームの子がキャッチャーをしてあげているのである。しかも、どの試合でも。自らの得点の妨げをしているのだから、一見不自然な行為である。しかし、それが、本校がいっているところの

“まなざしの共有”なのではないだろうか。彼らは、勝敗を競っていても、ただ勝てばいいと願っているだけではない。たのしいゲーム、意欲のもてるゲームにしたいという気持ちを各々がもち、みんなで共有しているのではないかとわたしは感じたのである。これは、わたしの願いでもある。

「競争」をいかに学ぶか、今年度の研究会が楽しみになってきた。

ベースボールをやつてみたいやでした。しかし、やつてみるとそんなでもなかつたです。まあ、1塁とか3塁の関係とかがまだよくわからなければ、なかなかおもしろかつたです。空振りばっかだつたけど、点は何点か入れることができました。もう、やる前は、いやでしかたなかつたぐらいでけつこう意外でした。慣れていきたいと思います。

1番目、M君がバッターでした。それで、点が入ったときすづごくうれしかつたです。番目、わたしの番です。はじめは、すかぶりしました。M君がバッターディスプレイ笑われやんかなーとか思つていたけど、みんな笑わなくて、ひと安心しました。わたしは、ずつとすかぶりしても、みんな応援してくれたり、男の子は「こうしたらいよ。」と教えてくれたりしたので、わたしはホームランでしきつたです。」  
〔後略〕

今日、5時間目にベースボールをしました。わたしのチームの名は「レギュラー」です。  
〔中略〕

# らいぶ★スクエア

# Action 5

社会科

# 紀州徳川家八代將軍吉宗

## ～個に応したひとり学習の追求のあり方～



6 B担任 田中 いづみ

和歌山には素晴らしい自然があり、昔から受け継がれてきた文化遺産や名産品、言い伝えが残っています。その中で今回、学習対象の中心に考えているのは、紀州徳川家の「和歌山城」です。五代藩主から八代将軍になった“徳川吉宗”をクローズアップして学習します。320年前の吉宗の痕跡を見つけて！自分たちの足で歩くことで、見えてくるもの、感じることがたくさんあるはずです。普段何気なく見過ごしてきた“吉宗像”や“和歌山城”的歴史を学習しながら、今の自分とのつながりを考えます。ひとりひとりが何に興味を持ち、追求を始めるのか。クラスの課題に向かって、36人が様々な角度から追求ができると思っています。子どもたちにとっても、自分にとってもたいへん楽しみな単元になりそうです。

江戸時代と今とのつながりを見つけよう

附小のまわりで吉宗の痕跡を発見！

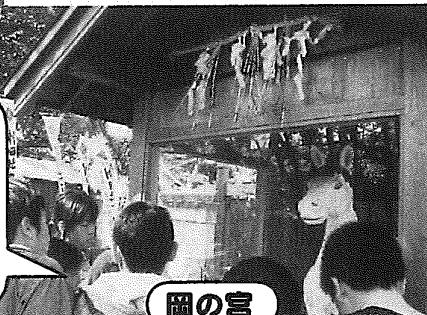
今から二〇年前に吉宗  
は学校のすぐ近くの吹上  
邸で生まれたんだって。



青宗生誕の地



吉宗の銅像



閑の言



監河局

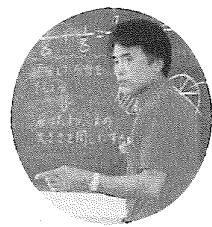
### 社会科と並行して

6B時代劇スペシャル “八代将軍吉宗” を制作しよう！（みらいの学習）

クラス全員で“吉宗”的時代劇を作り始めています。“320年前の和歌山城やまわりの様子を、できる限り忠実に再現しよう”を合言葉に力を合わせてがんばります。今はまだわからないことがいっぱいです。“食べ物は？”“髪形は？”“家来は何人？”“着物は？”“仕事の中身は？”“趣味は？”“和歌山弁で話していたの？”……解決しなければいけないことがたくさんです。さてさて、どんな“吉宗”的時代劇ができるやら。楽しみです。

## 教育実習生の算数授業

算数専科  
愛須 一弘

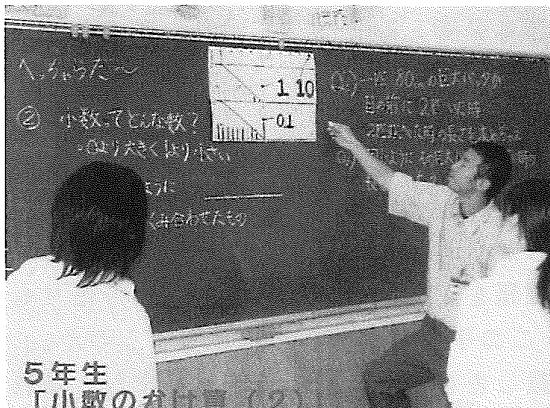


「時の流れは実にはやい」と感じる自分はトシなのかもしれない。

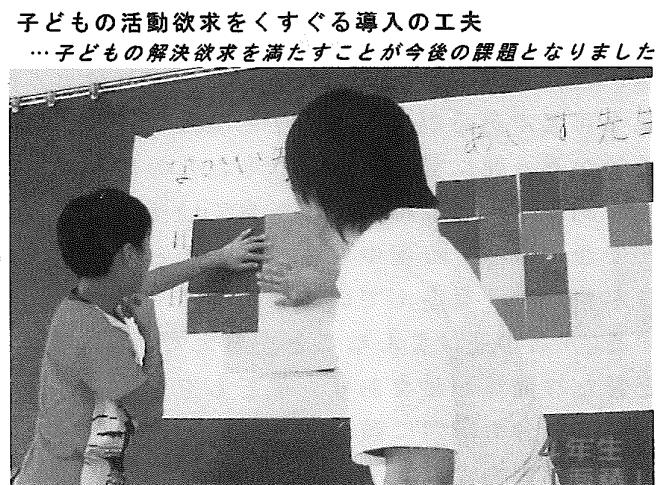
もう随分以前のことのように思うアテネオリンピック。テレビ画面を通してではあるが若者に多くを学ばせてもらった。それも感動を通して学んだのである。彼らは自身の汗と息づかいで、私たちの心の隅にしまい込んである大切な精神を呼び起こしてくれる。

『論語』の中に「一以貫之」という語句がある。これは、自分の選んだ道は一念を以て貫き通し成し遂げるという意味である。人間は弱いもので、何か障害にぶつかればくじけがちである。しかし、何事かを成すにはその障害に打ち勝たなければならない。そうしてこそ真に成し遂げることに価値が生じてくるのではなかろうか。障害を恐れていたのでは進歩は望めない。自分自身を高揚させるためにも、障害を恐れずに、我が道を貫き通すことが必要である。——オリンピックでは、どの選手にもその力強さがあった。

さて、毎年9月になると本校にやってくる若者、それは教育実習生である。少し上の世代は“R25”と呼ばれ、「覇気がない」などというレッテルを貼られているようであるが、うちの学生諸君はどうだったろう？



5年生  
「小数の丸め四捨五入」  
板書計画をもとに授業展開を説明する教生先生  
…子どもの視点で具体的に考えようとしています



子どもの活動欲求をくすぐる導入の工夫  
…子どもの解決欲求を満たすことが今後の課題となりました



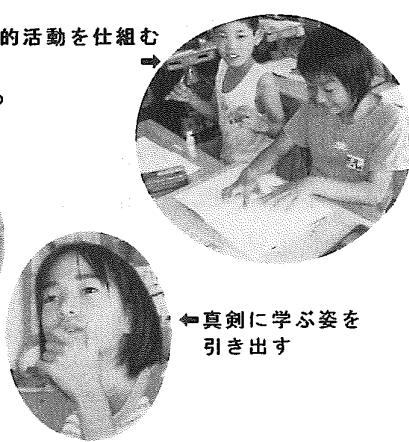
「単位量あたり」  
視覚にうつたえて数量を捉えやすくする  
…学習材は子どもの側にたった活用を！



内的活動を伴った外的活動を仕組む



嬉しいときは表情が明るくなる



→真剣に学ぶ姿を  
引き出す

・・・やはり学ばせてもらった。“若さ”とは、生まれてからの時間の問題ではなく、何を求めて前進していくかとしているかという精神を指すのであるということを。

教師としてまだまだ若くありたいものだ。子どもが輝く授業を求めるながら！

## 原点に立ち返って

須佐 宏



今年も、例年のように9月3日から4週間にわたって56名の教育実習生がやってきた。思い起こせば、私も大学4年生の時、彼らと同じようにこの附属小学校へ教育実習にきた。確か4年B組の配属であったと思う。担当の指導教官は、大学の陸上競技部の先輩でもあった内田敏夫先生。クラブの直属の先輩ということもあり、とても親切にご指導をいただいた。それに甘えて、教育実習後も卒業論文作成のために授業を提供して欲しいと無理難題をお願いしたり、ご指導に逆らって授業案を変更したりと無礼で生意気な学生だったと思う。当時、内田先生はおそらく今の私と同じ34歳ぐらい。12年たった今、同じように私が、彼らの指導教官として授業を後ろからみているのだから不思議な気持ちになる。

各学級に2~3名の教生先生が配属され、一人あたり8時間前後の実習をするのだから、教壇実習が始まると、自分の学級であってもなかなか授業ができなくなる。子どもたちにとっては、若いお兄ちゃん・お姉ちゃん先生が一生懸命授業をしてくれるし、休憩時間にはいっぱい遊んでもらえるしで、この教育実習は毎年の楽しみとなっている。私にとっては、自分の原点に立ち返る大切な期間となっている。教師にとって子どもを知ることは必要不可欠であるが、いかに子どもたちの姿が見えていなかったか、この実習が始まるとよくわかる。逆に言えば、子どもたちの姿がよく見えるのである。4月に出会った子どもたちと約5ヶ月一緒に過ごしてきているのだが、授業中の姿を第三者的にじっくり見ることができるのは、実習中ならではのことである。後ろからみていると、日頃見落としがちなつぶやきや一見遊んでいるのかのような動きが、課題を追究するための動きであったりもある。「この子はこんなことを考えているのか。」「この子はこんなひらめきをするのか。」と新たな発見が日々あり、子どもを見取ることの難しさを再認識させられる。また、これまでの自分の実践に照らし合わせて教育実習生に指導していくのだが、伝えている言葉のひとつひとつが、自分への戒めとなって返ってくる。「そういえば、自分もこうだったなあ、だからこうするようにしてきたなあ。」とふり返ることができるのもこの実習期間ならではである。

教育実習が終わり、秋本番。なにをするにも絶好の季節である。学級集団として少しずつまとまりを感じさせつつある2Bの子どもたち。そして、原点を見つめ直し、よりよい学習を展開したいと願う私。みらい&教科の学習を通して子どもたち、そして私自身がどんな成長を遂げられるかわくわくしている。

### From Editors

11月19日（金）は2004年度「教育研究発表会」です。ぜひご参会くださいまして、ご指導、ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105 FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp